

季寄
註解

改正月令博物筌

二月部

二

058 (58)
俳諧資料カード

年代

編者
(筆者)

書名

備考

③

改正月令博物筌

二月部 二

(下垣内蔵)



吳市阿賀北五丁目三番八号
下垣内和人
電話の六三三三三九六番

二月部目録

△印あるハ能借の
季と持のハ

○養生の法。雨風の考。采の計
山。妙菜。もの外人。家直。室の。こ。ハ
外々。よ。粒。多。あり。ゆ。ハ
月録。み。ハ。し。る。さ。ど。

二月

卦 月支 調子
陰陽生 異名

ニ
初

△驚蟄節

○七十二候
占候

ニ
二

△春分中

○七十二候
天気が候

ニ
三

二月日令

二月日の定。り。る。こと。千。支。の
ま。ご。ま。り。こと。と。爰。小。あり。む。

△中和節

酒
△献生子

ニ
四

上春服

△吉野餅配

ニ
五

△南二月堂行

日
△秋奠

ニ
六

△初午 稻荷祭

△水間祭

ニ
七

△東福寺懺法

△戸耶祭

ニ
八

初午講祭

日
△南都春日祭

△近本妙寺詣

日
△大原の祭

二月 目錄

△八幡初卯	八	△園轉神祭	八
踏青節	八	迎富	八
賜入	八	蚕農市	八
萬神都會	八	△出代	八
△行基祭	六	△二日灸	六
△祈年祭	六	△新能	六
△若宮能	六	遺教經會	九
祇園八講	九	△貴船五穀祭	九
泉涌寺舍利開懸	九	△百花朝	九
列見	二十	△朝節	二十
△三月堂水取	二十	△二月の別	二十
△涅槃會	二十	△さり佛	二十
△佛の別	二十	△天壽常樂會	二十
△暖峯柱炬	二十	△彦山祭	二十
△真福寺常樂會	二十		

△餅花煎	十	△積塔	十
△貝寄	十	△觀音誕辰	十
△浅間祭	十	△普賢菩薩	十
△天王寺聖具會	十	△比良八講	十
△天神御忌日	十	△某種御供	十
△天和の節	十	△道明寺祭	十

二月令

此部ハ日の定まりたる二月一ヶ月のあつたりのあるす。

△彼岸	十	△彼岸迎僧状	十
△天王寺参	十	△天王寺踊念佛	十
△時宗踊念佛	十	△社日	十
男女嫁娶	十	△紙鷲	十
得子	十	△初雷	十
鵜鳥の圖	十	△候霜	十
△水口祭	十	△田畑野山燒	十
季御讀經	十		

三草木

此部より二月一ヶ月までの類とあり

△苗代 △同葉黄 世三 △種浸 △種和 世三

湯種 △種比 世三 △種蔣 △種草 世三

△藍麻 △種く 世三 △蕨 世三

△蒲公 世三 △杉菜 世三

△狗脊 世三 △枸杞 世三

△五加木 世三 △虎杖 世三

△韭 世三 △蒜 △野蒜 世三

△水葱 世三 △薺花 世三

△菜の花 世三 △大根の花 世三

△雙草 世三 △未黒薄 世三

△草芳 世三 △草花若葉 世三

△萩の焼原 世三 △芦角 △芦鉏 世三

△角組芦 △芦の葉 世三 △艾摘 世三

△若紫 世三 △接骨木花 世三

△銀杏花 世三 △紅梅 世三

告紅梅盛文 世三 △八重梅 世三

△座論梅 世三 △越中梅 世三

△黃梅 世三 △初桜 △初花 世三

△待花 世三 △糸櫻 世三

△燒桜 世三 △見桜 世三

△一重桜 世三 △彼岸桜 世三

△熊谷桜 世三

種植

草木のたひまゝなりを接木するの事なり此下小あり

△接穂 世三 △茄子栽秧 世三

△西瓜 世三 △木 世三

△木 世三 △蓮を植 世三

修樹 世三 △葉種根取 世三

月生類

此部より一月一ヶ月の生こと集めたる

△果鳥 △雉子 世三

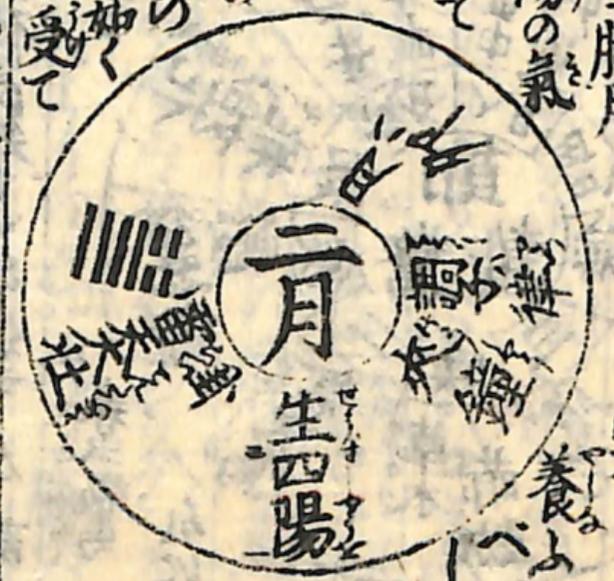
△燕 可製	△引鶴	△孕雀	△孕鹿	△蜂	△蝶	△蟾	△蛙子	△蒸餅	△塔	△むろこ
野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
△歸雁	△鳥巢	△松尾鳥	△鹿角落	△寅	△蛙	△青蛙	△鮓子取	△田螺	△寄居虫	△馬刀
野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野

△此部ハ風雨の占。破軍の
 三必用
 此部ハ方の日々のよう
 他行の心得。作事のうち料理
 こん立の法。食物のようあり。其外
 是あつた日。定の事ハ口の日
 今この部ハ此部ハ日との
 三月 目錄終

二月之部

△此印あり。非借の
季とのり。

當月の清風。臈月
 舒はて仲陽の氣
 整野外へ出て
 青艸と踏天
 氣と專小受
 則扶陽の
 術を草木の
 日告とす。如く
 人ハ日の影と受て



異名

△仲春 △陽中 △如月 △今月
 △夾鐘 △驚蟄 △春分

△小草生月 △梅見月 △雪消月
 △梅津月 △衣更着

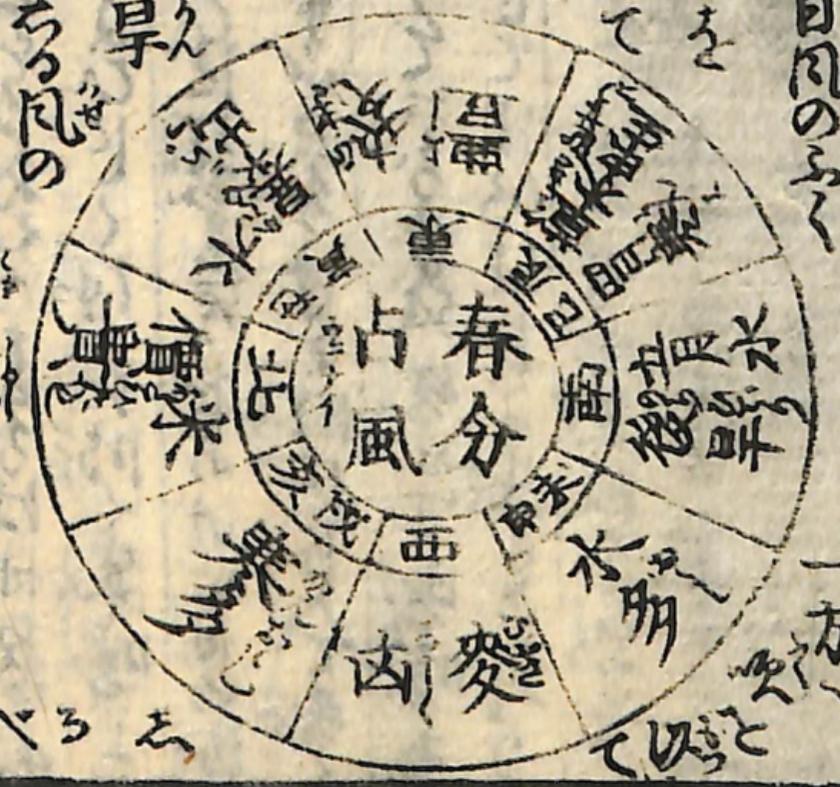
異名註

○夾鐘ハ 條の名
 夾ハ字甲也。而の物あり

雅曰二月為如。如ハ二月ハ酒
 春分のこけハ二月ハ
 蔵玉 小草生月 頭

みどらとるげよき。ちいさな
 月竹なるむら

天下大平國由たつたりの春
 氣懐の方の生い中に生るる順を
 かり青気右にこれおあさふ
 死にたに生るる候はつらとし
 氣はこれが年は雪こく
 くすまのりあし人氏災
 占候の云々
 雲の早の日は
 てあつた
 けをき
 け日
 方
 温
 寒
 豊
 水
 旱



日令

二月日の定つたことよみの
定りたることけ級はつら

日朝 中和節

唐世初春を中
初春の候はつら

中和酒

日唐世百官は酒を
二月曲水はあじ

詩 花隨春令發 鴻慶歲陽過

獻生子

唐土民間の
儀は百穀果の種

を盛りて相共
を盛りて相共
を盛りて相共
を盛りて相共

上春服

唐土は正の貴戚
聖衣の衣服

天氣占候

朝日風雨
朝日風雨

行して人
又病あり
又病あり

妙術 明日いよいよ日出でる
たげ志の心を去り

てせんど二杯のことで又かたが
だせば疲さそうなくともたなく

無病めし長壽をばうり
實に是神仙の奇々妙法なり

吉野餅配 朔日花供職
法の兩行人

本堂へ出て御供奉幣
廣庭ふる餅をまきくさる

南都 西京薬師寺造花會
朔日七日まで金堂中

いろいろの遊と遊と大法會
行る俗西京の死とくろ云

二月堂行 南都之水取
朔日より十四日まで

牛王加持の修法あり上七日大像
觀音下七日小觀音と勤る僧徒

修の僧といふる
俳ふるや修の傍の出れる芭蕉

大坂 天王寺六時堂修上會
有朔日より三日追酉ノ刻

上丁 釋奠 孔子となるといふ
二月八月兩度有

謚を大先至聖文宣王と申奉る
いへく朝廷より年毎に大學寮

こそ孔子をまつる人々と法は
ては孔子と教子といふとある大宰

府こそは孔子と関子騫といふ
多きしよし延喜式よむる文

武天皇大宝元年二月よりは一
まりとなり後花園院寛正年

中々をゆきくさる應仁の大乱より
絶より孔子ハ上一人より下萬民

至るまで天下萬世の師され本
朝もまつるゆひよりいへく毒く

に次第に詳かりし〇礼記王制に
秋葉奠幣とありある秋奠と和

訓よふとまのり

哥 年中行事

二位中

かゝるのかしこたふけとらじとて
ひしをのめとらまうるたふ

俳 飯焚の輔ハす味ハ秋奠 嵐雪

秋奠鳥の及喃こせり 野坡

詩 上丁詞 唐 陸放翁

燎火明中庭老樹泣殘雨

白頭奉祀事 恐羅劇仰俯

三終樂在懸 再拜肉外俎

誰言千載後 恍若到鄒魯

如何儼章綬 日夜苦蕪楚

吾國雖編小 大社祚茅土

藏書如丘山 及物無一羽

吾其可憐哉 去々老農圃

初 稻荷祭 諸國これを

山城伏見のいるりといへるハ元

明天主和銅巳年二月十一日

け山に祀りて古曆を以て

考ふるにけ日午と云五穀の

神とされバ稲神とも唱ふ山を

この峯と云本社第一ハ宇佐

虚茅二素盞鳥尊第三大

市姫又田中社四大神併て五

座と云永亨十年三の峯

今の地よりはせりけ日ハ洛

中洛外より群衆す市人は

黍粟等の種とるるじあるひ

い土人形さうろは深草の名
おさればなう古の杉と杉てか
さしぬりし又意とも杉さう

哥 夫木

知衣

いさう山杉のあさ葉をばばはく
かへるいさうさうろのともろ人

後拾遺

惠慶

いさうこのむぎさうろちたき
我おざこと成神もさうろよ

頭伴

いさうさうろの枝とたづのまて
あまうのくのかさすりさう

延喜年月次屋風初年来の画貫之
いさうのこ我こさすりさう
さうれ能のさかゝさうらん

俳心さうろ枝のまはさうろふ支考
うにさう初年及の小條系全

狂初午はうさういれとさうばう
はさる化さうなをとのさう自悔

水間祭 和泉國水間觀音
行基の他聖武天

皇の勅願此日ろくにさうめい
年北厄難と除く草薺さうては

俳さうの火や水さう
の鼻の先 ぼ生 京 真如堂境
内いさう系

京東福寺懺法 惠日山と号懺
法公の時に六根

の罪と懺悔する修行は日名画
兆殿司の画の觀音の像世三幅と

かくるこ又十万の札として火除の
守とがすの紙は十万の字とか

いて寺内同聚菴よりいさう
俳記さうの像も懺悔よ京福寺越人

摩耶泰 棋州免原郡畑原
村山上よあを佛

母摩耶山切利天上寺と云天
武天皇の御時法道仙人の創造

かろけ日泰詣の人へ福とほろ又
馬の無難と祈る土産もの昆

布と賣是と摩耶昆布と云
山の絶頂へ絶景と掲播又四国の

山海一目にのぞき見ゆるるる

① 撰 撰版のそらもはしし耶系都丈

② 狂 系流の山の下からのなるこれ

湖春

近江本妙寺詣 今ハ寺院跡
たう旧跡ハ

三上山のほとりあり今も初
社より詣ずる所今も土祠上り

上 南都春日祭 仁明天皇
嘉祥三年

九月始て中臣季基奏聞とへ
て清和天皇貞觀十一年十一

月九日庚申の夜初て行る其
式は次第に委し関白藤原家

① 哥 柳川オニ百首 顯仲

恙てんぐいのらきてまき日山
松のさそとしらやまこりけ

日 ありの下たえごとそ忍いともべん
かすぐのふけ井とまつとも

① 詞 小車。数人。裏。初冬。南家。三嘉。

上 大原野祭 山城乙訓郡
京より七里

河内春日の社といはれり
仁壽元年二月后宮御所の

① 哥 年中行夏 經賢僧都

さけりけやり入井まうと一は山
こやけりそくよ花のさくゆ

伊勢物語

大原やと一月のふもくまうと
外代のゆもたれひいづら

① 詞 系毛車。おろろ。夜。ほがすれ

京 八幡物部。神まあり伶人
山井多豊安倍とこれと執

上 園韓神祭 古大内裏の
宮内省有後

禁をいそりす昔ハ二月十月に
系議一人なる所の秘て事と秘也

たけのほろ酒醒井通にあり 本誌報云

非人曰くこれ其味のなま 都丈

二不成 踏青節 二月民俗酒

日就日 踏青節 されづゝて

郊に出でてお賞とると踏青節も

云聞中二日とつてはるゝする

占候 二日雨あれば蟹煮

うらまひ 大よばはる蟹の早

迎富 携へて出で弦歌

とん楽て暮にころこれと迎富

とも云日中の地盤の事なり

賜尺 唐制是日近臣よ

唐の尺とたきし

蠶農市 唐土蜀の國に

二月二日八日と雨

日かいかか入りの道具と賣

ちり其あたひ系貫にいころ

萬神都會 二日とりよけ日

夫婦のたと禁

出代 出替今日より未年二

二月二日近と奉公人の期

とす京大坂の三月五日

九月十日お年と期とす

非次の野や物靴のからひやそ麦林

行基参 津の玉比湯川を

ちり比よ一日の鮠ありて縁記

あり忠度のうたひよ月も宿り

るとしむし延毒式日僧

正行基昆陽院の雜事ハ抄澤

玉司別當と共に檢校と知る

云く延元二年將軍を武赤捨文有

ふつやいと 伊奈小豆煮煮る巫

二日灸 二日の灸が 如泉

狂二日やいとみたりこのこと

もて成てはるゝする

祈年祭 中災なく四時順度

なれぬ人しり祭

之背神抵官をける今へせはむ

○年中行事 いのりていしのことなるるるが代を

京 六條府宮に盛のまを 行 入野鴨川東五條より

七 日新能 南都興福寺南大門はみ 四座の内二座休暇

能 地うたひの盛まを 其角 金比勢の能のありし

狂 春日の能の能の名 貞柳 とぶの所ありて

春若宮能 九日ふ南都若 宮のまを

勤 じ十日も 八 今日白髪 とぬくべし

占風 東南の風水 祇園 西基風

八講 八講とは法花八の巻の大 意と論

九 日遺教經會 釈迦堂大報恩 十五日

泉涌寺舍利開帳 十五日

十 成京 北山鹿死寺祭 同

十 列見 六位以下の能 有とのと

兵部 の二省より 出 はれ出る 上

容 依 上 と入る 上 つ 下

け め 冠 かざり の 冠 あり

俳 列 名 茶 石 引 伸 と 烏 帽 其 角

詞 百 あり 冠 が は 神 中 とき か 冠

十日 百花朝 十日とかくいり 新雨 新雨 百花朝

十一日 占候 十一日 天氣快晴 天氣快晴 あり

十二日 占候 十二日 夜雨 夜雨 あり

南都二月堂永取同大續松

二月堂ハ羅索院云天平勝宝四年沓門実忠建立を傳に因伽

井有是と傳に若狭の井と云い皆

井のありと取て修法あり

蓮麻そとむ都の

占候 十日と 初農の日と入晴

蝶會 唐に花朝をとつて蝶 と撰會とあり

花朝節 百花生日とも云

替市 此日かこの及具うりこ

涅槃會 涅槃像二月

二月十日 佛涅槃すこと記あり

二月十日 今の十二月

改めこゝろ 釈迦如来ハ

教をよと稱しと極戸

何の辺安楽林の中に

志とつゝ其号ね

中より信末集福の傳ハ

教司の重とて日本

世とてらき月が

あつれやとよみまことひん

① 陸のき。こが。世持。ちち。落の林

② 俳死よまては死さらぬや花の時考

③ 体堂の賦とこねねん像 其南

④ 不とけとい候の花は月夜外 日

⑤ いろくに鶺鴒鳴らんねんの日揚洋

⑥ 狂佛どもふぬ逢途の名かれや

⑦ ねん像さかけたのむけこそ 志相

⑧ 雪果 仲まの帝はこいひと

⑨ 嵯峨 柱續松。今秋清涼ささ

⑩ 山崎寶寺 松の踊躍は是釈迦尊の

⑪ 大坂 天のまじり糸はねん人の

⑫ 南都 真福寺△常不舎あり

⑬ 金圃のすれは人像と用

⑭ 常系とはね 豊前 山を

⑮ はんこの糸日 餅花剪火 十

⑯ 子山なる老の 日小花くそといふてとりのらひ

⑰ されと恋花屑とらへ候の屑と云を

⑱ 十六日積塔 光孝天皇の御子

⑲ 京奉満寺 雨衣の皇子は盲人

⑳ 以下の系多々金後の小治院

㉑ 聚菴に律の換塔金と候

㉒ 南にあり祖沙像 八十 日就 峯定

㉓ 寺觀音會式 北六里へる

㉔ にあり大敷山と号す白川坊

㉕ 皇の寺建之二坊あり修驗

都なりは日風はげしきれば世に大慈山のあまなることあり

十 かひいせ 貝寄 天王寺の聖雲念の曼殊沙華より

解る貝成位者のうらみりよゆくは日右貝ことばの浦にさる

ハ終末よりさふくくるおこい日の月と△貝寄何とひさり

哥 續後撰 天教 前大臣大長今さくはたまたへまこなるまん

慈波のもの人こころれ貝

非 貝寄や外に青ひあせ地干那

觀音誕辰 は日と祝考の日とす今十八日

と甘しは日 廿 淺間祭 信州淺けあること 日 間藏あり

今二月祭なりは月八日に山はとひらけは日とやうりさる

○説く二月廿日駿州安倍郡淺間の社本殿重の祭なり是を△淺間ゆつとる

齋果あり社外に養とて備へ

非 今らにゆるまの砂烟 乙由

廿一日 普賢菩薩 毒ことけハ 妙持空を

廿二日 大坂 天王ち△聖雲念の修人者ありを子者と

聖雲念とも云は二日を子の像義二

圓華代六防堂のりし並一舎村

二舎村をその傍院を供奉あり

堂なるの善悪に齋果あり

乾より敷に入るとはるるは衣裳の糸かくはらひし本工へ下に

敷はけし寺年中の法念の道中よりけ日成系一とす大なる

花筒を二舞臺の比隅にたつる廿一日試采あり

哥 係氏紅系加

非 聖雲念所は惣とすは成如泉

中聖雲念もあんで去れり

瓢水

○我々此風しめりぞ御事今も臨

○狂 天さうの業成りて 未未

何となく面おもひつらむと

金ふふ系并勉土退屋

太春廣隆寺

御式古ふ堂
無二殿中像

京

後鳥羽院は年々加茂松
の下家にて是とほむ御

西遠の喜いはり日四廿 近江長

ふ事には終るは日必と月をくあり

○秘の徳未とかくさくさく

○非さく後よぬは海の日や帯渡

日五 京 天曆年中小社社と建

供これと公系控の御供と云日

日二日廿又日ハ天曆大自在天

神のかとあがら後いし計日也

○善の告ありて多る御徳天化

二年より御禰院おて八儀を

○管取の事考ありて是と云

○よく奉教又禰大に匡衡曰天

後自在天神のありひの天トに

○陰樹一人と猶導し天上ま

○月日と一と多る氏と忍味し

○純中文通の大徳月月の執

○元霽山住心院の徳心敬信

○都は聖考に於て運命と路

○或時 人をあつてあつた未と

○云句に引かひりの御うのたけ

○あるらんし付られたるは天神

○感ありてふふ持るるの大事を

○水の巻那腹の巻二巻と掛け

○たまふとるんをれしうの魔

○中又傍坊のやしる我た

○ていけふこの家と云う

これ春秋七日の事なりと云ふ事
いふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
石の録は彼岸へ日本の風俗
ありと云ふ事なりと云ふ事

茶の子 畿内の流俗あり七日
の間亡人の日ある

野菜の食類や知音の人ふある
非彼岸金の菜は子種は彼岸

状 彼岸還僧 片カ十廿八尺牘

我等亡母為彼岸中

先慈諱晨偶中彼岸

日以因之摘菜蔬供

會預設蔬齋伏乞王

靈あいに付還市傍説

趾臨敞廬為修其冥

徑馳聞致度以山路

福則存没均感賤价

五市若乃此担加奉納
謹言 ホウ トク 奉償

尺牘 書替 上中下

玉趾 上室秋 獅座 上小伴奉告
交座下 飛錫 奉償 銀鹿以報

彼岸 天王寺参 彼岸七日の
る傍切あり

出て修りす男女冠糸と中
中し婦人へ衣類とかがり拭

よ鬚ひ出て髪拵とりひす
るの教の由忌糸いよひし

能堪しも神ぬぎかけて彼岸死支考
彼岸といは彼岸の吾ひ日る備山

狂内んひびぐんは彼岸も毎午まで
此ちの世法をやれりる應り一朝

同誦念唄 天王寺念仏堂
おて法あり

天子の名号として廿八菩薩
の画像をかいて修りす奉納大

念仏寺より持来る又西門を極東の東門にあつるを昔より

其下にあつまり西海の合目と

観音の弘法大師もは西門

よて日想観を修したまひい

まひぐん中日の影をばは

入石をとおがまじんがためし

俳むらうらうらびぐんの名を翁庸又

京 御景堂△時宗 彌念佛

又條格西にあり毎年

芸秋二季の彼客 踊躍念佛

あり申世の東尼と擧へるに

府を制す御景堂の稱はる

ち号は軒長光寺と云ひこ

さらけに仏君と謝して余念

なくれどりよ病るべの言

法花經ふけ又義あり

哥 一遍上人

そねばん子ねだるべおれ義節の

法の乃よいをねだるべ

狂世へこれて後後のあつて

り心教堂備念佛 声可

社日 立春よりみづの戌の日

と春社と云ひは

土の神とあつて土ハ万物とやし

なひ五穀と生す春の農事の

よからんるの戌いのち秋の其

徳と報じる意たす 燕の春社

日にあり秋の社日よぬ

俳 うへあねはくと教よ燕め斜水

社日 共工氏子

左傳曰共工氏子

好舟車のりつる足の達する

窮めえずとつるは能水土と

平ぐ故に祀りて社と守勾龍

と風俗通云脩とら入

方壇 壇と築きて土地の靈と

祀る豊饒といふ

陳平分肉 前漢陳平里中の

社の宰ころる肉と

分事甚ひとし 父老曰善哉陳
孺子兮幸たるや陳平曰嗟乎我
と天下の幸からしりばまこと
肉れごしし云々

治龍酒 社日よのひ酒と云
石林詩話よ出る

社日よ酒とのりば龍と治と
こりなかりかりたる故なり

詩 兵部李濟

社公今日没心情
為之治擊酒一瓶

社美 唐吳越の俗必美
と以て祀ることなり

社翁雨 社翁いづれ水と食せり
故に社日ゆる雨とゆふ

詩 社翁ノ雨五言詞

幾點社翁雨一番花信風
社日ノ雨ハ草木ノタノニハ父母ノゴトニシカ
モ年中一番ノ風ナリ

詩 社日七言ノ詞

今朝社日傳針線起向來

櫻樹下行 社日ニ女ハ皆ハリニテトヲ
ヤテ思トセタ花ト行遊

男女嫁娶 周媒氏の注
陰陽交て以て誓

礼とすすハ天の時ニ順スことなり
されはけ月誓婚よよろし

紙鳶 春の風ハ下より上
のぼる紙をこめて遊ぶ

非 ちね板や履なまじり紙をこす支考
秘考とや遠志の抱きて紙をこす百猿

狂 ちのちのちあけてのちのちのち
あはれいづれいづれとかなり 本端

紙鳶 故事 風物 筆ハ 琴ハ 漢李鄴
宮中ニヨ井ニ帛

鳶ヲツクリ線ヲ引風ニ乗シテ
ノボス後ニイカノ首ニ竹ヲ以

笛トス風ヲフクメハ聲ヲキスソノ
声ヲヒクカニトシ

未央高祖遠逝又量

漢高祖陳豨チシ征スルトキ韓信カンシ紙寫カキカニツクリテ遠逝エンシヲハカリニナリ

得子トコ 二月乙酉の日の午の時ニケツ夫婦フウフ水抱ミヅカにをの心孕ココロじ

初雷ハツライ 仲春ニケツに初ハツめておと

けいより 虫動ムシくゆへ 倭ヤマトの虫出ムシし

古今集コキン 天のふくまきとちうアマノなるかきも

俳ハイかきうらたはるハルとちうチウの梓シや左近サキン

雷ライや他のホノまのまのマノの心ココロ嵐雪アヲユキ

狂キヤウみとらふ名ナよるヨル入イるルとちうチウとちうチウ

遊山ユウサン ぶらぶらブラブラなまナマらむラムとちうチウとちうチウの心ココロ

詩 雷七言對句 詩楚

響ヒキ滿ミ山ヤマ河カ傾カ地チ軸カ 擊ウツ枯コ株カ

光ヒカリ乘カ風フウ雨アメ入イ天テン都ト 急キウ雨ウ過カ

三サン國コク英エイ雄ユウ空クウ失シツ勢セイ 對タイ雷ライ光カウ

一イツ鄉キヤウ孝コウ子シ為タ傷キ心シン 聽キク春シュン雷ライ

山ヤマ鳴ナ喬キョウ木ボク例レイ 滂ハウ沱ト無ム所ショ避ヒ

水ミヅ激ゲキ蟄セキ龍リウ飛ヒ 霹ヘキ靂シ不フ堪カン看カン

雷ライ 雷ライハ二月ヨリ 百八十日ノ間

二地ニチヲイヅルイヅル萬マン物ブツモテタ 地チヲイヅルイヅル八月ヨリ後ノチ百八十

日ヒノ間ノ地チニ入イルル万マン物ブツモテタタ地チニ入イルルハ 害ガイヲ除ノゾキ出デハ利リヲ興キス人ヒト君キミ象シヤウ

雷 人君之象

人君之象

雷ハ二月ヨリ 百八十日ノ間

雷植

陳ノ時蘓紹ト云人雷植重廿九斤十九モノヲ

得タリ宋ノ時沈活震木ノ下ニテ雷襖ヲ得タリ斧ニ似テ

孔ナシ○時珍曰雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタル

モノナリ云

○本朝ニテモ雷ノヲ千タルアトテ

異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロ

スルノ諸書ニニエタリ

雷除ノ守

越ノ白山鶴也

有其ノところと畫ニ持スルバ雷雞とのがろくたに果あり

哥後ち羽院御製

白鳥の松叶本陸よかろてやとくににさやう



候霜

霜の目より百八十日のありおろるる

又秋屋にりてゆより来る日ハ十八日のおろるる

氷口祭

稲のみにあつた氷の枯る故に農人苗

代水と引く口と糸をまらしめぬれハ苗瘦深れハ苗腐八九

日と後て苗うるハ一五ふとよけもがあつたをよ一と其分氷

の冷暖かむれよりて氷口とあらくめらむと考へらうま

はるハみ十串に幣こ一はさしてありよさすたり

哥 夫木

師光

ますしとらうまのふいぐまそ水にまらうやどのあまらう

非 ありの二十串とのくは即許六

あはれをたゆむるま蕉

田畑野山之焼

芝焼 旱を

地と焼て移る雨あけをを火米といふ和名やといふ

哥 夫木 苗代菜黄

小山田の苗代々々のまゝとて

ころり身のくまよふよりくま

非 菜黄のまゝも秋とせたり 苗代田天川

種浸 菜とくゆるに生を被るの
あら枝とあらひひ守被

奉後よ丸出く枝と下す

詞 たい伏△種言 枝ひ守にロー
らかり

哥 千首 烏尹

種井 種と浸る井と名づく
種ハ中めくくやひひふふ田の
たく一とちらの苗代のあり

非 ちかぬの本よ繩匠種井式考
るそりのあせのかういひあはして
たる井のらぬやまはま

湯種 農人種とぬる湯は浸
てすけばよくせすと

又浸たる種と火のかきとらと
あきりるもよくせす

種蒔△種じ△種正

哥 夫木 國信

蒔のとり苗代々々をあせおきて
入うそ種井に種下しはる

非 種下し後ころり小柄其角

藍麻蒔時 畝の小名か 芭蕉

蕨 異名 紫塵初けまふる
とけこれと今や小兜の香

の曲らるやうにとえあるかう
してまふとひくけの鳳尾のじ

高こにアノもあう其根葉を
皮肉括くくらくて再三たひ

判裁法とれハ葛粉とちらぐ
用由るなり

詞 たいふひかきとび うれはわ
なり

哥 新拾遺 くらふと 和泉

そこの日へまや外のかとらひ
つけハまといんあふると

哥 万葉

思ふくぐ垂るの上はさわらひり
もえ出るまよなかりにたつこころ

哥 亜槐

ふ里のなほのさうらびもとれて
かぞへまゝいふ年もほろこり

詞 かきとらび。さうらび。さうらび。さうらび。

連 ひくさぬのちうとすゑの蕨が絶也

排 びのやまやあぢのま 蓮二
あぢのまのゆるあぢのま

狂 ふりあぢのまぢりふりあぢのま
あぢのまぢりふりあぢのま

詩 蕨薇詞 杜子美
雨足空山少 蕨萌春深 蕨
直 蕨紫金莖

直 蕨紫金莖 兩ハレドモ山ニ未ダワセ
モ、エイデ子庄春フカク

ナリテニヨキトハル 伯夷不食
紫金莖ハワセノ名也

周家粟味必先知此味清
散飴夷カ者陽山ニカクレテワラヒヲ
喰ソメタルユエニ今ノ味ヲシルソレマ

アハシラナシダテ
アハフストナリ
詩 蕨七字對句 詩礎

承露未開 仙女掌 元無骨
ワラヒニタトヘタリ

擎天先出 小兒拳 已作拳
コトナシホ子

口中藥 ワらびあぢのま
あぢのま昆布の石付あぢのま
を介合せて術よほくを合くゆく
興癩之藥 くららびの粉とあぢのま

蒲公 異 僕公盟 蒲公丁 黄花
名 地丁 白鼓釘 金簪 柳

知名 ふちあぢのま
ふちあぢのまふちあぢのま

哥 花さくも人やふりあぢのま
若さくも世のまよとあぢのま
公通

⑤ 熊たんやや塚も一くし者よの巻巻
ふく袖う緒えらうはくしきまの野牧

⑥ 狂たんほりあとしきものれ献まど
えはく結とくやほしかり 左又

杉菜 上子のたけやまふと出た
るさうふ或ハ形土子に似

て別よとていなるとらる料ありとてい
大和を料と白ふ杉はゆるなるたて

⑦ 藻鹽草

かこのまががころのけしひより
とていなるさしものつくりしころ

⑧ 狗脊 大つらびの根大
の脊骨のぞくぶくの

かさちわらひよ何て味へおとる
大つらびと名づくかなり

⑨ 異名 尔紫蕨の藁の迷蕨
非狗脊ハマらびのうの二さじ 春理

⑩ 枸杞 本料に曰枸杞春へ清清
子と名つくるハ枸杞葉

と名づく秋ハ却老子と云冬は
地骨根と云ハ地骨皮と云ハ根皮

抱杞 朱孺子幼ニニテ道士
王元正ニツタラ出散ニ

故事 逐犬 居テ一日水ヲ汲ケルニニテ犬ヲ見ル
孺子是ヲ逐フテ抱杞ヲ糞リ生タル

下ニ入ケリ是ヨリ是ヲ服ニテイニ
仙術ヲ得タリ列仙傳ニ王玄真

ト云フナリ

⑪ 非 枸杞めと書うつは抱杞坊 瓢音

痔薬 枸杞の根つとたぐらうし
煮て蒸へ洗ふべし病を治す

⑫ 五加木 異名 文章神ハ八角茶・五佳
一枝ハ五葉あると云ふ

⑬ 虎杖 酸桶筆 酸杖ハ皮と云り
食人に味す右に名付ニ才

高貴又余のおあり夏秋花ありと云り

虎杖

淡路宮

日本紀反正天皇
淡路宮ニ生レタテラ

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ
時夕子ヒノ花オチテ井ノ中ニア
リ故ニ御名ヲ多遲比瑞
齒別天皇ト申シ奉ル

狂日カハ扶ムハクヒヨク
かたけてもころぬの虎ノ
桃綺

葑

異名 長生葑。翠髮
和名 古美良。美良。出ス

中心莖と抽きて白朮をひらく
生ものごと山こらとりふ

取ひひの入ると出す
生らるの

けと朮よ合せ取へ入まてひの
かゞざるもとよそかまべし

苳

異名 美菜。卵苳。和名
比流。和名 苳。ふハニホヒナリ

ハニクムノ心ノ香ノ
野苳 皆食之

葑蒜

倭健尊

日本紀景行天
皇第二ノ御子曰

本武尊東夷征伐ニ玉ヒ山海ヲヘ
テ信濃ノ山ニ入既ニ峯ニヲヨニテ大

ニ飢ツカレタニヒシ故ニ山中ニ御食
ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ玉

ノ前ニ立テリ王アヤシミテ一ツノ
蒜ヲ鹿ニ彈カケレバ眼ニ中ツテ

死ニケリコ、ニ於テ忽道ヲウシ
ナヒ出取ヲシラス時ニ白狗来テ

王ヲ道ニキテ出ル
コトラ得タニラ

源氏品定

源氏品定

たまふらふなるよひすめこれに蒜をひて
たれと其考はうせな入るふらふらふ

たまふらふなるよひすめこれに蒜をひて
たれと其考はうせな入るふらふらふ

あや

薤露之歌

齊の田横カ
門人歌ヲツ

クリ 薤上露何晞明朝还復落

コレヲ薤露巷里ノウタトイヒテコノ

人ノ葬リヲオクル時ニ

ウタフタリニナリ

夜雨剪

郭林宗友人ヲ見
テ夜雨ヲイトハス

韭ヲ剪テ炊餅ヲツクル今

洛人コレニナラフ杜甫詩ニ

詩 夜雨剪春韭

俳 中いやら敷うらぶれたる地ひか野坡

韭摘と原居の筐ふりころれ 言水

地ひる生ふ本の指も糸糸糸 芭蕉

狂 後こひて捨ておさうらんくの

焔ういじん白くふなりなり 平田

妙薬

瘡薬 はんく三胡椒
五分 右搗合せて

一九くくみの肘の内らふく

足付とくべし男は左り女は右のよ

疔ノ薬

地ひる葱やと枳丁の

肉をそおりの付てよう

薤乱薬

り死せんところの

大いんく五ッ皮をととぎ粉の

不とりのおつさ土一塊にすを

ませ汲豆のあらにその入澤と

口中へつぐぐべしゆまり

膈薬

地ひるの葉干て粉の白

子をわし粉うして用由

又韭蒜

とくひて口中のふはひ

を去るうはははかよとと配と

かしてはとととととと



水葱心摘

一名 薤菜

○三才図會にありありひひ

あり紫を色作しなまこい

後あり。波高。は搭板。水葱

こまの別名は

哥 万葉

大伴宿禰

まを最うごの里のう人こなま

苗有るのうありうた

俳 水葱指となや性しよう初ん半月

薺花 （異名）護生草 三線州
こりふ花白く 小鬼は

草の茎とににんぐさくふに引張
ひけば三味線の音なり花は松のじ

◎家集 好忠

狂ひくころふ三味せん若の心こころ
やうふふこころにけはぬらみ鯛一

◎非 ようんれがまづる花咲垣根外芭蕉

◎大根花 （非）大根の花をこし 畠方
たぬこ◎非 ふのたや成し 連二
かろふのた

◎末黒之薄 （非）おろしを搦の下 糸あまをとりふ入
一はよととこのまふのまのま

◎草芳 （非）あつまのゆはく 香らつとらふかり

◎詩 芳草之詞 （文選）秋草
芳草生兮萋々 玉孫遊兮不歸

◎詩 芳草七字對句 （詩）礎
情如芳草連天碧 穿巷陌

◎身似楊花盡日狂 （非）如有情
カラダハアソビアリクダ

◎草若葉 （非）若草といふて
若草といふて

◎正月の季 （非）少長ト
たるといふ△菊の若葉△葛乃

◎ワカ葉△萩 （非）葉
わかの葉△萩はまの葉

◎非 若葉 （非）葉
若葉といふて

◎身似楊花 （非）盡日狂
カラダハアソビアリクダ

◎草若葉 （非）若草といふて
若草といふて

◎正月の季 （非）少長ト
たるといふ△菊の若葉△葛乃

◎ワカ葉△萩 （非）葉
わかの葉△萩はまの葉

◎非 若葉 （非）葉
若葉といふて

◎身似楊花 （非）盡日狂
カラダハアソビアリクダ

◎草若葉 （非）若草といふて
若草といふて

◎正月の季 （非）少長ト
たるといふ△菊の若葉△葛乃

完帳の初夜ふけしよや柳みほ葉 支方
常ふ遠坂ふやんとさくらの葉も

萩之焼原 萩のともぐらも
つゝ。萩の生ひ

初。黒く芽あり是と焼せ
つゝ其外説いろくあり

いまごと洗ぬびらりあつば
爰ふつおをいし介き力
燃唇し心得てよろく切ふし

哥 新千裁 寂蓮

よゝめいごごみし井西のうみん
こゝろいれふらさるのやけり

俳 焼くまもたさるゝ萩のまほ葉 雷安
ちりもや中かきおの東鑑

芦角 角の推 角祖若全章
藪。葎の芦んしり

哥 萬葉集 石川女昂

我とし早ふくゆあしうみの
あしうせつめつめたるへし

連 ちもてあしうせつめつめたるへし 絶巴

俳 流依あふことさそりへか 李吟
角ゆるぬのじりありづる退壽

狂 かざんかろあしとあおの完る兒
りこもれたるふの折所 左久

詩 七字對句 野相公

紫塵嫩 蕨人拳 手

碧玉寒 蘆錐 脱囊

艾摘 通俗蓬の字と用ひ法
なう制法しとささる

又食あふもさるる

哥 家集 好忠

あし小田のこぞけねのうら

今ハミをくしことさるる

夫木 俊成

なをしとそ麻のよりたいたる
あしうせつめつめたるへし

百人首 實方

⑤ 非 かにげらる せきをひきよめるのよきよ 由水
ふらの油のこぼれ白ひのこも 晩水

⑤ 女薬 艾とくく 腹肚をほけ
ぬいほす 傷毒 ころりて

⑤ 若紫 異名 紫草
日向うて 根の

皮を 衾布とほの 散りて
衣とほりて 是とて 衣とて

⑤ 伊勢物語

かきうけり ありし 衣のすし 衣
まのし のふらふからん せは

⑤ 非 ちうけい ちうけい ちうけい ちうけい

⑤ 狂 ちうけい ちうけい ちうけい ちうけい

⑤ 接骨木花 花のよきよ
つて 花のよきよ

⑤ 傷損とほりて 功有とて 骨
とほぐの 文をまかり

⑤ 疝氣薬 たづの本に 草入 せふ 薬

⑤ 非 関左の母に 男ひし 鳩 花 寛東

⑤ 銀杏花 異名 鴨脚 花のよ
青白く 二葉 花のよ

⑤ 非 ちうけい ちうけい ちうけい ちうけい

⑤ 紅梅 ちうけい ちうけい ちうけい ちうけい

⑤ 紫系樹 花のよきよ 花のよきよ

⑤ 鹿枝樹 花のよきよ 花のよきよ

⑤ 紫系樹 花のよきよ 花のよきよ

⑤ 新千載 元精

⑤ 新後拾

⑤ 新後拾

ふりかろる指のちのぬあけよ
くゆる井うすたぬれくくぬ

哥 後拾遺 元捕
梅の花秀はくくくた白くくく

うさくくくくくくくくくくく

哥 家集 道達院
梅の死ぬくくくくくくくく

か面のちのちの枝にをくけき

哥 類題 紅梅連 雅世
まふくくくくくくくくくく

梅のねと

詞 朱の唐。紅のち。うさくくく

の枝の本まにぬくくく。由るくく。ま

づく。ぬのくくく。あふゆ。ま

つむくくくくくくくくくく

非 紅梅の巨魁。まもづりえ淡人

紅梅に曳りてなぐ老父が衣角

狂 美くくくくくくくくくく

詩 紅梅詞 貞柳 韓駒

路入宮家百歩香隔簾初

識漢宮粧 三千ハタノヨキ屋ニ入

ガアリテ其ハヨソホヒハニスヲハ

テ、見テナシガ漢宮ノヤウナル

直疑夢到昭陽殿一簇輕

紅洗淡黄 昭陽ハ前漢成帝ト

殿ナリ紅バイヲ見レハソノ殿

ヘユソノウチニキタルヤウナリ

ヨリ美人ナドロトムヲガリニ

解ヲバアラフヤウナリ

詩 春半花終衆多應不奈

寒 春ハ十カバナシ

識渾作杏花看 北人初味

今テコロ花、サカントハニヨリテ紅

イヲミテモ梅トハ思ハス杏ノ花カト

詩 紅梅五字對句 紅梅五字對句

照溪如濯錦 嫩蕊融紅雪

隔嶺似流霞 繁葩剪絳綃

詩紅梅七字對句

詩楚

春水薄涼燕脂片カサズツキ 香不盡ニホヒタカキ

寒日晴烘蜀錦机カケル 酒初薰サケ

壁上詩蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

サカニ開ク時一婦高キ髻三カニ 大ナル袖ニテ高ラニ倚リテ

モテアソヒ詩壁上二題ス南枝向暖北枝寒一種春

風有兩般憑仗高樓莫吹笛大家留取倚闌看

狀告紅梅ノ盛文尺牘

前庭満開 庭ありく紅梅多中元花

蜀錦集目邀士 之殊潤お見中心肉之托

人妻云ある三人お招き奉足下典二三僚

外像奉掛連秋お燈中聖像 共暢觴詠之懷

持帚俟尺牘 去替上中下と記と

満開芳 芳発。芳妍。綽約。明媚 馥郁邀士吟客。佳客。

逸人足下典二三僚 上公典同遊中 君且負僚暢觴詠之懷

上將驛吟筵中 催寬興之會欲試賞遊

狀紅妻返奉梅下續詠之催趣喜々雀

梅下續詠之催趣喜々雀梅下續詠之催趣喜々雀

梅下續詠之催趣喜々雀梅下續詠之催趣喜々雀

子知ひ花出骨席ては

躍 豈不登臨

如例よまなは後中の上

文揪 附馳使

尺牘 上中下 去務と記と

催趣 促遊。展懷。邀宴

喜々雀躍 快衆心。想甚欣然

上 称快万衆 中 何喜如之 豈不

登臨 上 步而捧誦 中 詰鏗金

色 上 入廣夏受奇瑁 中 馳

驚而容吟慰 中 参扣宜唱愛

馳使 介子。僕士 上 貴奚。

遽使 中 崑价。走力。銀鹿

八重梅 花の八重なるをい

狂 新波はの梅をさるよふとこか

俳 八重梅や尼の 座論梅

花浅紅より葉多く実一枝

ありあり人のたしこむと座と

越中梅 紅と帯を後梅に似

黄梅 迎春花といふ梅に似て

正月に開く故に迎春花といふ

初櫻。初花 花は二月

早く咲く梅の惣名より初

三月草木の部ふくハ

哥 万葉 人丸 佐のいの里にたしこむ初花の

哥 續後

伏見院

咲きとむる外山の夜の花をさへて
る遠にのりくる炭のまき

哥 新古今

家内

ちりんらんらん志のべし歌
たつたのこけおさくら花

待花

花のもとにゆきしても
はや花も咲ぬとあつた

哥 家集

頓阿

とくくへて花の本の芽も春雲
おはまたなまこころうらうら

哥 新拾遺

俊成

山桜咲やらぬるはれこころ
まことそなたる春夜月の

狂 みるやうな物とわひ花霜春

狂 まう咲くこと待とる花

本の下によれ

糸櫻女 志たう
極も

まうして鳥有

いひ無糸とらつてお
こまひとくにさくやう

哥 あすもこ人きう樹の枝細と
柳の糸よむすはれらう俊頼

俳 百すちも春のたあう糸極野坡

糸極名も指よと花見外京甫

可 吹へるも掃らういとまら北枝

狂 だくちの庭に咲がる糸さう

むとんた風のうらとるらん貞大

かもの中やもんだのやうまねど

今もいひとど

姥櫻

莖短
花

密てまふら花老の蕾は花は

俳 花散といとれはつ花極 立甫

狂 蕾はととらつ花とらつら

花うらとつとつ花はまお 左柳

児櫻

花白ち花極
抱てあう花は

俳 ね人のるもの

重極
花

せん児さうと 鯨花

花

哥 花はとらつとらつ花は
たぐひとらつとらつ花は

二月 草部
一を挿うると十文 彼岸櫻

櫻の挿うるときは、咲くまで十日おち春分の日ころといは花挿の

那挿なり別名をべーしと云

① 熊谷のうらまゝに彼を挿ひ哉目

② 狂まふと云ふは、さういふと云ふ

すらんあるものいひが、挿ひ貞ふ

種 植 草木の挿うるときは、

接穂 異名 接頭。小篋子。

果より、これ枝とつぐこ、こよ

ちる若枝の肥盛るる陽に、い

たうと、さういふべー、挿うるときは、

らに、緩うると皮と骨とをいふ

が、いふと、いふと、春分と前

と、するもの、いふと、いふと、

挿木と、いふと、いふと、

① 小刀のそれから、いふと、

② 月影の、いふと、いふと、

接ぎ木の、いふと、いふと、

挿木に、いふと、いふと、

茄子栽秧 ますい植は、

根に、いふと、いふと、

土と、いふと、いふと、

種蓮

ろろぬを焚のせむい
らるる不いる泥を

栽へ挿挿 挿壓 下の枝の土
油とよむ

分きつ目と入をたなられ土をよむ
其枝の上よも本の方よか土を

分本の方よか分いへ土をよむ
あど時と土の上よとよむし次の

本木の方よ切りて九月下旬に枝
し栽し五月梅雨の時分根を生

たつものを知るべし 今月木犀
躑躅をよとよむは

壅培 根本の土をよむ
と今月 石榴 梨 海棠

考によししを糞あ焚いころし
回糞よく 或い馬糞を用い

挿木 此法の黄土と月に
未しとよむと考ふに節

よくすドハ六七寸はうり地に死
はきかちめて枝を馬の耳ねどく

にそぎ同く大ききころる列の
木の枝よと先穴とあけ其穴に

そぎたる枝を五寸じはよむ
水とそぎ陰地よむ或いよ

おふいよころす一月と焚たり枝
に至りて根を生たりたる樹し

栽のべし今月に本にうり
檜栢 樅丹栢 羅漢松 海紅海

棠 山茶花 石榴 山誓 抹藥種
薔薇 黃梅 櫻等

根 沈存中が考ふに
法草藥を採るよむ

月八月と用也よむ
二月の月の芽は八月の苗い

だうよと放よとらに焚のよ
よと茶條いあし宿根あつた

ハ則苗出よとらよむ
時取べし根たりていよとよむ

修樹 菓樹の小枝枝を切ら
実とよむとよむ

生類

は教よハ二月二月
の生類をこのこと

果鳥

かたよふ鳥かたよふ鳥
は鳥は鳥カホクカホク

名ことりつり鳥はまひつりつり

哥 夫木

光俊

のららるる家のふれこのも

ふりつりつりつりつりつり

哥 万葉

鳥の生よここく采もなごも

名よふ鳥もあつりつり

俳 貞名や一尺の不ためてり方美

雉

異名山雉
高祖の夫人は太辰の漳と

雉といふて野雉といは

とる今も野雉といは

和名木々須昔は雉子魚ハ

鯉と名上とるのほもく名もハ

雉子たおるきりの名場

うふかやうもとるか

其外はかうたていせおはる

むりに木のつぎ枝はははは

哥 了たのむもがためは

とれしものおあ

詩 雉七字對句

詩礎

田夫就餉還依草共啼花

野雉敬馬飛不過林起平原

詞 雉之詞

白雉振朝飛声来表太平

若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現

童子懐仁至中即作賦成

若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現

童子懐仁至中即作賦成

若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現

童子懐仁至中即作賦成

若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現

童子懐仁至中即作賦成

若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現

傳母悲

春秋時衛公

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ル

カ遂ニ歸ラスニテ死スツノ
傳母コレヲ悲ニテ女ノ常ニ

ヒキニ琴ヲ塚ニモ子ニ千彈
ケルトキタチニ千塚ノウチ

ヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ
見テ傳母イヨクカナシニテ

琴ヲ鼓テ雉操
飛操ト云樂ヲ作ル

童子不
魯ノ暴王中年ノ令トナル其
所ニスミケル童子アリ雉ソノ

捕
傍ニアレドモ捕ヘスソノ故ヲ問
ハ雉雛ヲツレタレバコレヲ捕ルニニ

ノビスト答フ是暴王ノ政令邪
ナキニヨリテ虫境ヲ犯サズ鳥

獸ヨク化ニテナシタガヒ童子
コノ仁心アリコレニ異ナリト奇

燕△同巢
和名豆波久良女
異名乙鳥

玄鳥デニテカガハ色ニ鷲鳥ハツテカガハ色ニ
由ツル由ルの青鷲を制するも

於波ハツテカガハ色ニ天女ハツテカガハ色ニ
天女ハ白燕と云レバ貴女と生カテ天女と云フ

○春來り杖去る其心けける
と甚捷し直に翻り仰さ

花の他名のなるふあふあ
と人あふ葉とほろろあ

哥 建久元年百首 定家
とを歌てなれんえの流ばらしめ
暇やたて後しあともふ

哥 家集 頓阿
けえも古葉存てやまは然の
やどとこととねはらうらうら

哥 千首 師兼
ふだまのひまの尻もをうらて
まはうらになく遠くま

哥 毎日百首 為家
二月のすまうらとあふあ
くらくもまらうらうら

詞からびすび。のらと名 異名ナリ
翻る。たすのて。あふ葉はむ。

及ゆる。の。か。つ。し。ぬ。髪。つ。の。あ。し
よ。は。つ。る。を。か。こ。と。か。つ。し。ま。

連るの目とかなる軒窓の雲が肖拍
非にどく下はけてまひ合猶過連二

菊をふるる孤蓬の影ぐしか死水
空家もとぬけ邊や社のま 向隠

山の傍に雲とくまを入日か 其角
おちよといふもまぬ燕々去来

狂る里に身をまうづばののづらら
うらうらふささるてやある紫笛

たてさぬも様なるぬいし花ぶしのを
ほむらうらといふそいつらハ舊道

詩 燕之詞 白樂天

羽族知机社日来翻身尋

主人樓臺 社日ニハキタルヒルガ

還下度柳穿花去又来

其飛カケルイキヲヒハ雲ヲオカニ雨
ヲクミリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲ

ハリトニテ兼ツク 撥雲掠兩高

クマリ花ヲクマリテ 兩翅拂殘
行テハカハリスルナリ

花露水一毛不染地風

埃 其飛ブツバサハ花ノツユヲハラヒ
テ地ヲ吹ク風ハカノムレトモスコシ

鳥衣國裏風光好

養子成時便帶回 鳥衣國
ハツバメノ

住ハ国ナリ 其ノ国カヨロキニニ子ヲ
ヤシナヒエテハ又子ヲウレテカヘルナリ

詩 燕五字對句 口上

風簾雙過影 夢遠鳥衣巷

画棟並棲身 心飛白玉堂

詩 燕七字對句 詩夢

羽翼不沾寒食雨 經春雨

夢魂應遠落花泥 逐暮雲

燕 燕 子 國 唐 王 柳 海 遊
几 二 舟 破 板 一 枚 二

取ツキテ一ツノ鳥ニ至リテ六
 人來テ王樹ヲ見テ是我王
 人ナリトテ引テ宮室ニイザ
 ナイムスメヲ以テ樹ニメアセ
 ケル然ルニ其人ニナ 照キ物ヲ
 着タリ樹ニスメニ其故ヲ問
 テ是イカナル國ツ答テイハ
 ク鳥衣國ナリ其後樹家ニ
 歸リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク
 ニツノ燕サヘツル樹コニオイテ
 カノ止ニル所燕子
 國ナルヲニレリ **石燕** 陵
 山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛テ
 イケルカゴトシ雨ヤム時ハ還テ
 石ト **生之周** 詩經天命玄
 ナル 鳥而生商○高
 辛氏ノ妃郊禱ニイノリ
 テ燕ノ巢ヲヒロヒ食ニテ
 契トイフ子ヲ生リ
 後ニ有商氏トナル

玉京紅縷 宋ノ女妣玉京
 カ家ニ燕巢ヲ
 ツル其子生育シテトモニ
 去ラントスルトキ玉京カ臂
 ニ集テ別レヲツク玉京紅キ
 糸ヲ燕ノ足ニ付オキタレバ
 明年ニタ其糸ナカラニ來
 レリカクノゴトクスルコト六七
 年ニシテ玉京死ニタリ燕ハ
 カナシク鳴ワタリ終ニ塚ニ至テ死
 避戊巳日 廿日ハ泥ヲフク
 一ス廣義見ニ

負燕 湯佐ガ家ニ巢クテ或日
 雄猫ニトラケル雌燕其雛ヲ哺
 翼ナリテ歸ル其後毎年此燕ヒ
 トリクニ來リテ同巢ニアリケル
 一六年見ル人感号負燕ト云ケル

妙藥 淋病藥 薬とこそそ
 老るよして合へし

詩 歸雁五字對句

同上

已辭霜雪苦

玉塞情何極

寧羨稻梁肥

蕪葭夢亦稀

引鶴。引鴨

尾又作... 引鶴ハ... 引鴨ハ...

あぐあ... 引鶴ハ... 引鴨ハ... 十六年に大... 十七年に小...

十六年に大... 十七年に小... 十六年に大... 十七年に小...

鶴の リニホロウクワク 林逋籠鶴 林逋孤山隱 居ニテ常ニ

ニツノ鶴ヲヤニナフ 縦セハ飛出テ 雲ニ入テ多クニ久シウニテ又

籠ノ中ニカヘル 林逋小舟ヲウ カメテ西湖ノ寺々ニアソフコト

常ナリ 若其畝守中ニ客ノ 来ルコトアレハ 林逋力童子籠

ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラズ 林 南カアソブ所ニ来ル 林南コ

レヲ見テ **上揚州** 小説ニ 家ニカヘル 日人三人

アツニリ各其オモトコロヲ イフ一人ノイヘルニハ揚州ノ

刺史トナラン一人ノイヘルハ財 宝多ホシキ一人ノイヘルハ鶴

ニノリテ天ニホラニトイフ 其カタハラ二人アリテイハク

我ハ腰ニ十萬貫ヲ纓フテ鶴 ニノリテ揚州ニ上ラン

ケス ツルト **化鶴** 神異録曰玄宗以 苑ニ獵ス鶴ヲ見

テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西 南ニク時ニ益州ニ道觀ア

リ道士ドモ一歳ノ間ニハ三 四度来テ遊ベリアル時徐

佐郷トイヘルモノ外ヨリ来 テ彘子ニ謂テ曰我山中ニ行

テ矢ニアタレリトテ則其矢 ヲ壁ニカケテ後日矢ノ至

来ラバカヘスベシト云テ帰ル ハタシテ後日明皇蜀ニ幸

ニテカノ道觀ニアソヒ其矢 ヲ見テコレハ我沙苑ニ鶴ヲ射

時ノ矢ナリトテ此時徐佐ケ イカ鶴ニ化ニタルヲ知レリ

一客来吊

陶侃傳曰侃 母憂ニアタルニ

ヲヨニア墓ノ下ニ在リ勿心ヲ 二人ノ客アリテ来吊フ哭セス

テ退ク侃コト非常ノ人タルヲ
ニル隨テコレヲ視ニ雙鶴ト成

テ去之○右詩故事共引鶴
ニカキラス鶴ノコトヲ記ルス

鳥之巢古巢ハ栖

云多鳥ハ宿シニ独鳥ハ止
と云衆鳥ハ集ル云五雜

狙ズいイとくク鳥の巢ノをを供クハ
其巧ク人ニよリさスたりタリ只一口ニ西ニ也也

以て結束イぬ其堅固クなる事ハ何
小本ト扱テ巢ハ終ニ傾ク也也

哥 うウがガ不フ拘ク也也
かカいイのノうウらラにニさサのノいイんンへヘしシはハるルのノ

俳 多タ果ノにニしシてテ異イ核カ部フ連レ二
子ノのノなナらラうウもモなナいイぬヌるル也也

孕ハ雀ノ雀ノ子ノ 又又朽ク木ノ也也
射シてテををみミとト伏フ其其卵ヲまたタらラありリ

其子ノのノはハまマちチるル故ニ黄ク雀トいイふフ

哥 新撰六帖 知家

人ノはハうウれレ花ノのノいイまマのノいイまマなナれレつツ
去バしシとト才ノとトいイふフもモさサらラんン

○ 源氏ノ末ノはハふフしシ
むムとトさサれレのノうウ人ノのノ知チひヒるルすスもモめメ

のノまマとトいイぬヌきキりリ知チはハらラうウるル也也
いイつツとトありリこのノををををありリ

隊ノ子ノといイふフ物ノのノ名ノよヨきキなるル也也
哥 いイはハのノいイぬヌきキりリかカいイとトいイふフ也也

たりリありリしシやヤりリしシとトいイふフらラんン
俳 一ヒ只ニハニ孕ミとトすスもモめメのノ由ノこノハハ互ニ遊ブ

花ノるルやヤあアかりリ隊ノ子ノにニ井ノのノ陰ノ其ノ角ノ
妙藥 疔瘡ノのノ藥ノ 生スるル花ノのノ

扱テ土ノをを入レ息ヲををはハりリ也也
とトいイふフもモあアらラうウ用ヲいイふフ也也

なナんン産ムのノ藥ノ すスもモめメのノ巢ノををまマやヤ
きキはハ香ノ白ノ正ノ綱ノとトいイふフ葛ノ根ノ扱テ

十シ葉ノうウりリ内ノのノ男ノがガ子ノのノ小ノ使ノとト
あアらラうウかカきキとトいイふフ也也

腎茶 崔北羽水砂糖一斤酒一

升炭火にてせんかづ、春の松を煮ます

松茸鳥 菊いたききこへ似たり

香く春松の葉を食ふ

歌 夫木 寂蓮

深山木の香ふる葉よりうづれ来て

新焼とつとくみ松じやうとつと

非松むしるおもちとせり天女貞室

孕鹿 九の月より一子を

生どつり万葉の鹿

の子のひとりこ松河にゆめり

非花のまの畑の法に孕鹿白羽

角解こいつの鹿生て

三年じて其角自落

鹿角落 産後即まい葉 鹿の角と

非足弱のたうらもや鹿の角 潘山

為すまふの後の鹿思鹿の角 未山

妙薬 鹿て灰と童便を利ある

はさかこの葉 鹿の角美柏樹子

と茶ふに粉とひねりかけては

妙術 鹿の角とまづかよするは

鯨骨を加きて煮てぬすべ

蜂の巣 蜜の蜜巢の内よ

たふて冬合ふ

歌 夫木 寂蓮

深山木の香ふる葉よりうづれ来て

新焼とつとくみ松じやうとつと

非松むしるおもちとせり天女貞室

孕鹿 九の月より一子を

生どつり万葉の鹿

の子のひとりこ松河にゆめり

非花のまの畑の法に孕鹿白羽

角解こいつの鹿生て

三年じて其角自落

鹿角落 産後即まい葉 鹿の角と

非足弱のたうらもや鹿の角 潘山

為すまふの後の鹿思鹿の角 未山

妙薬 鹿て灰と童便を利ある

はさかこの葉 鹿の角美柏樹子

と茶ふに粉とひねりかけては

妙術 鹿の角とまづかよするは

鯨骨を加きて煮てぬすべ

蜂の巣 蜜の蜜巢の内よ

たふて冬合ふ

歌 夫木 寂蓮

深山木の香ふる葉よりうづれ来て

新焼とつとくみ松じやうとつと

蜜成猶帶百花香

蜜トスルニ花ニ
花ヲミルハハカニ

サテ蜜トナリテニ百花ノニホヒカアルソ

故 蜜糧

葛仙翁客對食ス客哥
戯ヲ見ト云葛仙曰リ飯

吐クニナ蜂

ハチカヒノオトミ

ニテ又三納ハ飯トナル 蜂飼大臣

十訓抄京極大政大臣宗輔ハ山

蜂ヲ何九ト名ケ飼玉ヲ故カク

号 窓中蜂 神瓊禪師蜂窓紙ニ

アタリテ出ニニ出ルコトアタ

ハサルヲ見テ世界カクノコトクニ

ロニトイヘトモ出ルコトアタハスト云

妙藥 蜂の巣と

女竹の葉とよみ一東にまきり三束よ

あ三升入て二升に造用乳の出葉

山蜂の巣とまきには 妙術 蜂

ちるに地は行くと丙丁火と二字と虫

口の中よとイテイ火と念ずると七

はして其土と

どうぬるし 虫

狂 白くひうなんごと同ハ地蜂の

あかところ入とよみひしせぬ之 蜂金

蝶 異 胡蝶。黄蝶 鳳上中。野蝶

右 笑名ハことごとく 品類の稱

とくくひの化したるのされば

とハ其心の念ふものたれば

哥 古今 おの名をた 遍昭

ちうぬまハ後のあことわらう花を

あひひさすことまこと 蝶うる

夫木 定家

乃のあらうらな花ねに匂ふらん

朝露の梅の花のこらうらん

ちうれんもまぬく尾雲にたひひれ

あられの梅をさすぬ蝶うる 正

詞 さいふ。ちうらん。まこと。初

蝶。花よぬる。たぐはうらう。初

てのあふれて。てんのうらう

。てゝ人のうろろ。おぬらうらうら
。香とぬとむ。曉なきやうら

〔連〕ころもまのよよけに。あまのこ蝶が宗

〔俳〕夕乃み町中に飛ぶこ蝶。ふる其角

〔俳〕くろくし麦の取ぬ小蝶。ふる曹長

〔俳〕遠きやまを渡る蝶のたふひ山里

〔俳〕そ行有の裾を相蝶。ふる川治川

〔狂〕蝶くの神さかふとこひやぐれを
人もかぬくつらふるまは迎 貞柳

〔詩〕胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲。両翅量金碧

ニツノ眉ニハ黒キ糸ヲニキタルヤリナ亦
フタツノツバサハイロクノ色ノメクリアリ

ルナ 初来花争妍。忽去鬼

アトナシ 初テキタルトキハ花モソノ色
無跡 ヨキヲアラクヒタレドモ去テ

ハ夢ノアトモノユサスカホ
ヨキコトハイタラトナルゾ

○香鬢粉翅暖争飛。品物

タニヤリス。テコニツクス ヒゲツバサヲイロ
多情總属伊 トリアタカカナ

上國万家風。月夕樓臺取

次宿花枝 都ナトノ家多キト
コロニトビキタツテ暮

トナレハワカヲモフ。ニヨロシ
キカタノハナノエダナドニヤトル

〔詩〕蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影 乱隨狂絮舞

繚繞戀花衢 輕伴落花飛

〔詩〕蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞投幽檻 杜叟夢

力困慵飛过短墙 謝公名

蝶 嶺南異物志ニ人

蝶 嶺南異物志ニ人

斤ヲエタリ是ヲ噉ハキマメテ肥美ニ

庫中金銀錢

唐穆宗ノトキ
禁中ニ花開キ

ケルハアル夜蚊蝶數万飛來テ
花間ニアツル宮中羅巾ヲ

以テ撲トモ得ラズ帝綱丞
中ニバリテ數百ヲエタリ夜

アケテコレヲ見レハ庫中ノ
キニギヨクセンナリ

愛花人

長明養心集ニイ
ハクムカニ佐國

ト云モノ花ヲ愛シテ六十
年遂ニ飽カスイハク我生レ

カハルトモ花ヲ愛スルモノニ
ナラントノ詩ヲツクリテ死タリ

其後アル人ノユメニ蝶トナリテ
侍ルト見タルヨシカタリケレバ

其子花ヲ心ヲヨフホドウ
テ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソク

ギテ孝養ノ心ニソクナタリト
ソ孝心ノイタリカニスベキト

壯周夢

蝶タルヤカナラズ
分チカタクアラニ

云く是ヲ物化ト云壯周夢ニ胡
蝶トナルサメテ周セトモ蝶ノ

周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知

蛙異名石蟬丁子蟬

△蛙子一名科斗秋かけてある
ともあるとむり時と季とせり

△蟾蜍形大く△青蛙色青く蛙より大なり

△夫木 家房
これらるるみこくよとむ地にて
堀江の蛙あるときりたり

△千五百番 家長
まゝのふりの心田と来てふたは
略のふりごとく蛙かくらり

△新六帖 信實
まの門はれあるこむと名つけの
岩のうけに蛙なくあり

△家集 兼盛

はあゝ蛙のまの老より
ふそくやうたんまの小山田

詞すだく。法多。川池に沢田。
小田の蛙。あはれ。苗代あり。夕月

お。山次の花の雪。おまきよ。
蛙のまの老より。あはれ。あはれ。

かまのまの老より。あはれ。あはれ。
かまのまの老より。あはれ。あはれ。

俳我おと蛙鳴らん西り田 蓮二
蓮土も雨にながれて蛙ま 草也

角のこ蛙鳴 蛙のまの老より 其角
狂序のこ蛙鳴 蛙のまの老より

蛙 女子雑説 龍王海ノ辺ニ
蛙ニアフテ問

テ云 汝カ 喜怒何如 曰 我喜ブ
時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ
テシコレニ次クニ脹 脹ヲモツ

テシ脹リスギルニイタリ
テノキヤムナリ

毛弥

日本紀 應神紀 冬
十月 国栖人 国津物

ヲ献ズ此クズ人常ニ山ノ菓ヲ
食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云ハ本朝
食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ
ラニ醋ヲ和テコレヲ食ス唐ニ晏

群蛙ノ鳴ヲキハテイハク此殊
人ノ耳ヲ聒スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトンドコニ及
バズトイヒケレハ晏慙テ退ク

晏ハ鼓吹ヲコム人ニ○宋書曰ニ
蝦蟆ノ膾見ヘタリ○漢東方

朔カ傳ニモカハスヲ食フコト
見ヘタリ○淮南子ニ五月十五

日蝦蟆養ヲ作ルトアリ○花
史左編ニ百越ノ人好テ蝦蟆

ヲクラフ筵會アレハコレヲ
寂シヤウ美味トスルナリ

井堤蛙

袋草子、白帶力、草信始テ能因ニ

逢ニ時能因今日見泰ノ引、出物ニ見スベキ物アリトテ懐

中ヨリ錦ノ小袋取出是我、重宝長柄橋造、時ノ絶骨ニ

ト云テケレバ節信大ヒニヨロ、コビ又懐中ヨリ紙ニツクメルモ

ノヲトリ出ニテ見セケル能、因トリテ見ルニカシタル蛙ナ

リトテ共ニ感歎ニ又、フトコロニニテ帰リケル云

妙術

止蛙鳴、藪の末死、枝の多ふと更焼はて

鮎子取

東医宝鑑に青魚ノカ、トコ、救のみハカト、コ

蒸鮓

着扱裁前より出らば魚、大さ尺半塩おと、選干て

法ガハ出ル火ノあつて合らふ、俳むがまや教ス、けまぬれ衣、其角

狂ガ、さつひは、さつろ、さの塩抱ハ、いふいふぬ味て、まあれ、道鐘

田螺、田贏一名、田青の胡麻と、からしと、さむらう

妙藥

赤眼江、海塩、田螺と、あぶ粉と、白粉、か、唾、乾

更癩と、ゆる、法、田は、の白と、平と、よく、ころ、松の、み、と、伝、不、し

は、たる、と、松、と、し、と、と、し、と、ら、く、松脂と、田、の、お、不、と、加

う、す、お、と、お、あ、あ、め、付、へ、

總角の、結、ひ、たる、か、と、ら、の、ご、し、

に、肥、が、荒、後、の、結、ハ、ア、ケ、キ、と、

妙藥

産後、徳門、破、止、痛、と、治、す、

は、て、付、へ、し、か、ん、も、の、痛、と、治、す、

いばり病類

まの河と二三夜併

とまて後塔の要きこと付し

寄居虫

秋蟹に似て塔の売よ
やがるあしやこかり貝

一名寄居虫 朝鮮からん
だの扱よ一二尺のとのあり

非寄居の扱よとてははり提亭

寄居の扱よとては寄居虫とて由

狂おしと後の上から後せよと

宿さうのかひはるる信海

馬刀

後の如かる馬刀
の扱よあらはせよとて

非この馬刀は三月は仇敵 蓮二

内におて天なる馬刀の扱よ後 千丈

狂いしとせよとてははり提亭

つと後し水ひまはりて 宇羅

色柄木

三才舎回入字不伴
黄翅魚に似せり

非強きとてははり提亭の扱よ方策

仇良の扱よとてははり提亭の扱よ白羽

必用

はるの二月三月必用
ふはせの法号とせよ

破軍方向

夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
巳の方	午の方	未の方
卯六ツ	卯五ツ	卯四ツ
申の方	酉の方	戌の方
酉九ツ	酉八ツ	酉七ツ
亥の方	子の方	丑の方
酉六ツ	戌五ツ	亥四ツ
寅の方	卯の方	辰の方

日刻

はるの二月三月の日刻の別お
の目印の刻と相合ふははり

出行作事

西南より
てゆくべし

壬の日とのぞくべし 甲庚
丙壬のしとせよとてははり提亭

樂事

是月とせよとてははり提亭
ひて民俗内とたつ

はるの二月三月ははり提亭
拾ひまはりと踏むははり提亭
はるの二月三月ははり提亭
るひはり提亭の二月三月ははり提亭

さし寝系梅とさどてはたの
なる酔に舞いし暮と惜さめ
あるはたのし死めりたに
たしまはあひ日月人んを
としよ偏なき梨幸
中おのとしかなりのあを

天氣占候

二月卯の日
三あれの星よ

素同日丑に風らられば
人寒熱多しとりの甲ふに

雷あもバ大熱さる日雨みバ
早さる月ひつりまらぬ災あ

こ切糸の足もまバ杖米價さる
西のんまバ蠶糸もろほ「災

あつは月まらぬ死さ早さる月
能らまバ茶安し或は災あり

二月用まらぬ品 左るす
あるす

養猫法

ままらとよしと猫初
約め給とやた喰せりおらぬは

花壇土

は月花壇土とまはし

製筆

は月より三月古までに収め

制多くころ筆と佳とす毛ハ秋ハ
九月以に取らぬ赤毛白毛とを

はとす軸竹もはし其は切らさ
羽も竹と煎下と利もばたひ公守

毎く酒に硫黄と入まて筆の
毛をたを舒とへし筆の扱はし

果多生

梨も榴も杏もの枝よ

ぶとも其お枝相復のまはし
のまららとけけ枝の下へたハ
むやうよとへし葉あはせとら

雑品

葡萄の柄と椀幹を

あげおくべし。牆垣成葉ハ
べし。百葉の樹の下と春く

登しそのりよしとて草
木の茂らざらぬと社目まら

の柄と根よそくべし提ち
まどしと生とらるこいよしま

養生

二月天氣 晴暖の日と
多し三里路骨に寒

とぐり 陽氣とたぐりけの御座と
ふせぐ 寒に反にゆるり 御座

衝心のやまひましと 壽養
叢書にえはるり 但多穴ハ其

人の病 症によりてとぐりある
匠 右の二穴にかぎるべし守

服神明散 素家後神の散を
佩べし 蒼木 栝棟 附 烏

頭 雷 炮 細辛 各搗て
散し 紅絹の袋に入一人これを

脊に 帯まらば 水病はり
時 腹あはば けりよりそをぬを

假たてのあしと 服とれが
あせ出てやまひ 子速に愈

子を まらるは 二月丁亥の日香
絶と 枕 乾 陰 干 して 搗し

成子の 日 假とてのあしと 一
後とて 一日に二反用也

二月飲食并料理献立

禁 兔肉 二月 鶏卵 二月
忌 非と中ぶる 鶏卵 二月

心を 黄花草 二月
やぶる 二月 痲疾と発音

陳俎 二月 痲疾と發音
陰流水 二月 痲と發音

梨木子 二月 痲と發音
酸物 二月

大辛物 二月 以余
二月 千金方に

葦 二月 千金方に

料理 汁 二月 二月 二月

二月 二月 二月

鱠

こい。かき。つら。ま。

こい。り。名。けり。う。ご。名。けり。ら。り。せ。う。が。

白うさ。ほくし。美しき。さん。

坪。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。

ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。

指牙

し。う。さ。ほ。ほ。

ゆ。ろ。製。牙。ゆ。ご。ち。ほ。ほ。ほ。

ゆ。ご。ち。ほ。ほ。ほ。

二汁

じ。じ。ほ。か。も。

じ。じ。ほ。か。も。

煮物

鱧

ら。い。び。

吸物

あ。り。

まて。足

和物

た。こ。

い。れ。拾。

い。の。年。房

精。汁

つ。せ。せ。

根。い。も。

さ。り。茸

鱧

坪

焼。う。り。

長。の。も

差。味

こ。す。

う。り。う。り。

系。えん。ご。く

二汁

い。ご。

葉。ず。く。

煮物

推。茸

生。白。バ

吸物

和物

かん。ご。

揚。えん。ご。

吸物

時。魚

か。ご。

魚。

魚。

鳥

か。も。

魚。

魚。

青物

こ。ご。

ね。よ。

煮物

梅。花。久。貯。法

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

白。う。り。け。り。

竹。の。こ。

竹。の。こ。

竹。の。こ。

梅。花。久。貯。法

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

梅。花。久。貯。法。

に搗破ちぎの死の上うへまで上あるまで

細く入いる 糊かの入りいり 後にあら

とて人の通といなるいる 並なまにいて

用もちゆるいるいたいたいていて

等らいいるいるいるいるいるいる

とて人の通といなるいる 並なまにいて

用もちゆるいるいたいたいていて

二月終

